

栢木県現代俳句協会報

No. 162



第一六一号

発行所

〒333-0016
小山市扶桑二一八一〇中村方

栢木県現代俳句協会

発行人

和田 浩 一

編集人

松本 登子

令和三年九月三十日発行

歳時記と季語

速水 峰 邨



栢木県に烏山という所がある。現在は周辺の町と合併して那須烏山市となっているが、江戸時代には三万石の城下町であった。川口松太郎の『蛇姫様』の舞台であり、蕪村の師とされる俳人早野巴人の生地でもある。

当地には山あげ祭りという夏祭りがある。地元では「山揚げ」と呼んでいるが、この山

揚げが平成二十八年十二月、ユネスコの無形文化財遺産に登録された。それを記念に「やまあげ」を全国的に通じる季語にしようという機運が生じ始めたのが「那須烏山市山あげ俳句全国大会」である。俳人の黒田杏子・今瀬剛一・山崎聰ら各氏の協力を得て平成二十九年第一回、平成三十年第二回と開催されたが、平成三十一年第三回は残念ながら諸事情によって中止となった。

新しい季語が生まれるのはどうすべきなのか。あるいは、新しい季語はいかにして生まれるのか。そこで思い出すのは「万緑」。中村草田男の句〈万緑の中や吾子の歯生え初むる〉によって季語として定着したというそれなら平畑静塔の句〈山揚げにまことの雲も道具立〉がある。なぜ「万緑」が季語となり、「山揚げ」は季語とはならないのか。

「山あげ」は夏祭りである。「祭り」は夏

の季語だから、「山揚げ」も夏の季語でよいのではと思うのだが、「それでは全国俳句大会では無季の句と見なされて採ってもらえない」と反論される。確かに、俳句大会の選考では、「この句には季語がない」などと言って落してしまうことがある。

季語はいかにして全国区となり得るのか。例えば、「やませ」（夏）、「うりずん」（春）など特別な地方に吹く風が季語として取り上げられているのは何故なのか。那須烏山市の山揚げと同じ年に世界文化遺産に登録された京都祇園祭の「山鉾」、博多祇園祭の「山笠」は季語として通っている。栢木県にはまた、「初男体」とか「しもつかれ」がある。『角川俳句大歳時記』（電子辞書）の新年の部には「初富士」「初赤城」「初筑波」「初比叡」はあるが「初男体」はない。したがって、地元下野新聞社の「新春しもつけ文芸」俳句欄に応

応募してくる中には「初筑波」はあるが、「初男体」の句は殆ど見ない。また、「しもつかれ」は初午のときに供える栃木県の郷土料理なのだが、「初午」の傍題にも入っていない。辛うじて広辞苑に「酢憤^{すひかり}」としてそれらしい説明があるのみである。

「季語がない」「歳時記にない」は、俳句ではよく聞かれる言葉である。俳句歳時記とは俳句の憲法ともいえる程に権威あるものなのか。ならば、歳時記は一冊の書にどれほどの季語を載せることができるのか。因みに、前述の『角川俳句大歳時記』ですら「静塔忌」はあるが、栃木県が誇る文豪・山本有三忌、ドイツ文学者・高橋健二が名付けたという「一一忌」（命日は一月十一日）は載せていない。一般に歳時記とは、季語の意味や成り立ちを解説した上でさらに例句まで添えるのである。歳時記に季語を収録するために多くの取捨選択がなされていることを知るべきである。このように考えると、歳時記にないから季語ではないとは実に軽薄な判断といえるべきである。

余生いま異郷に慣れてしもつかれ 峰 郵
 (栃木県俳句作家協会会長・「暖響」同人)



九月七日に予定されていた第六十四回俳句研究会が、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。

今回は、講師の速水峰郵さんの「歳時記と季語」を現代俳句八月号から転載させていただきます。ご精読ください。(広報部)

諸家近詠



いつの間に花屋廃業極月に
 蹴上がりを競いし記憶鳳仙花
 爽やかにカレーうどんは大盛に
 彼岸花冥府の元へ道案内
 どら猫の声脚に寄り稲光

星野 治子

柳 浩二

剥く林檎紅となり子の嫁く
 石垣に石工の揃い鯛雲
 雪折れや水銀灯の揺らぎおり
 方程式解けて母のソーダ水
 教室は空になりけり蝗取り

根本菜穂子

夕日受け白鳥はなだらかな斜面
 朝顔時く五歳は五歳なりの穴
 ひしがたの密密密や燕の子
 それぞれの空を切り取るテラス席
 衣擦れの音に緑夜のすべり込む

和田 璋子

冬立ちぬ母の種火の残りけり
 待針の数をたしかめ除夜の鐘
 自己主張下手な子の手のあたたかく
 大壺にどさつと桃の花の束
 閑伽桶に花びらが揺れ街がゆれ

栃木喜美子

はき馴れた靴は枯野の匂いかな
 一瞬の瞬を待ちおり十三夜
 足裏の盛土を崩し大枯野
 真鯛の内臓を剥ぐ夕べかな
 仏壇の夫へ自肅の秋の風

第十六回

栃木県現代俳句協会通信句会

令和三年度結果

令和三年九月七日

*特選賞

和田浩一 特選

椿落つ八嶋八つ橋八つ祠

大嶋邦子 特選

バスを待つ日傘の中の子守歌

中井洋子 特選

田植機の後振り向かず去りにけり

石倉夏生 特選

何もかも忘れし母の目に青葉

速水峰邨 特選

小さきもの隠れて植田ささ濁る

須藤火珠男 特選

しがらみを脱ぎすてきたなめくじり

小林たけし

中村克子 特選

おくやみ欄にての訣れや牡丹剪る

*最高点句

白日傘開きて心定まりぬ

大嶋邦子

橘川芳子

幸田慶三郎

須藤正之

増山ちさ

森本金一

橘川芳子

中止

第30回色紙展のお知らせ

◇日時

十月三十日(土)～十月三十一日(日)
午前九時半集合

◇会場

栃木市栃木文化会館 一階大会議室

◇会員コーナー

『色紙や短冊』一人二点まで

◇特別コーナー

『私の秘蔵色紙・短冊(墨書と写真)』
茂木恭子追想

はがきで一句コーナー

※非参加者のために発表の機会を設けております。多数のご参加をお待ちしております。色紙展の参加者もふるって
お送り下さい。

※詳しくは実施要綱参照

【お知らせ】

○石倉 夏生

・現代俳句8月号に「百景共吟」が掲載されました。

○青木 廣子

・現代俳句8月号に特別作品「風薫る」十句が掲載されました。

○片桐 基城

・現代俳句8月号に「現代俳句年鑑2021」を読む」が掲載されました。

○速水 峰郎

・現代俳句8月号に「会員よりの寄稿・歳時記と季語」が掲載されました。

7月15日(木) 小山市生涯学習センターに於いて、令和3年度第1回役員会が開かれました。

※次号163号の
原稿〆切は
11月8日です。